

## はじめに

この本は、これから政治学を学ぼうとしている人、あるいはこれまで政治に関するいくつかの場面で経験してきた議論を整理したいと考えている人を対象に、わかりやすい読本形式で、私たちが「市民」としての立場から政治の世界をいかに読み取るかについて、考えを深めることをめざすものである。

「政治」の世界は、私たちの生活からは縁遠いように見えるが、じつは私たちが「政治」について日常的に考える場面はかなり多い。その第一は、マスメディアによって形成されるいわゆる「政界」に関する情報（ただしその多くが視聴者の選好・好奇心に応えるものに加工されたうえで報道されていることには注意が必要）である。議会や首相官邸を中心とする政界の記事は、ニュース番組で毎日のように報道されているし、日曜日には各TV局が「政治もの」と呼ばれるワイドショーを放送しており、今日ではこうした情報に接するなかでいわゆる「世論」が形成されている。第二は、私たちの直接的な政治的行動の場としての各種選挙である。近年投票率の低さがしばしば問題になることはあるが、そのこと自体はとくに大きな問題とはいえないかもしれない。政治的無関心層の広範な存在は、政治の混迷を招くものではなく、むしろ民主政の安定に寄与するという政治学者の見解もあるくらいだからである。

ところが、私たちと政治との関わりをもう少し異なった視点から見ると、私たちと政治の世界との関わりが、ニュース番組のたんなる視聴者としての立場に留まることを許さないものになっていることも見えてくる。たとえば、米軍のイラクへの侵攻の是非などをめぐる国際政治の世界は、決して私たちにとって遠い存在ではありえない。第二次世界大戦後、多くの日本人は平和憲法のもとで日本は戦争をしない国家であり続けてきたという自負をもつ

ているかもしれない。しかし、ヴェトナム戦争に出撃した米軍機の多くが沖縄の嘉手納基地から飛び立ったことに象徴されるように、これまで日本は朝鮮戦争以来ずっと戦争との関わりの中に存在してきた。そして米軍の爆撃を受け多くの同胞が惨殺されたイラクの人々にとっては、日本は米軍にさまざまな基地を提供しているだけでなく、いち早く米軍によるイラク攻撃を全面的に支援することを決定した存在以外の何ものでもない。このように現代世界に生きる私たちは、自らの意図とは関係なく必然的に政治の世界とのつながりをもたざるをえない。

現代日本の現状では、政治に関する基礎的知識を学ぶ機会とは表面的な政界情報の氾濫に対比してきわめて乏しい。多くの人にとって、政治の世界に関する知識は、日本国憲法の諸規定を暗記することが内容の中心である中学校社会科で学習した範囲を容易には超えないのが実情であろう。また、たとえば税金や医療保険、公的年金など身近な制度に関しても学校教育で学ぶ機会ほとんどなく、その制度原理が広く国民に理解されているとはいえない。にもかかわらず、私たちは各種選挙における投票行動だけでなく、日常的に政治の世界についてさまざまな判断を求められる。

したがって、この本において第一に意図したことは、私たちが政治について考え、市民として応答なしに迫られるさまざまな意思決定の場面において、賢明な判断を行いうるために不可欠となる基礎的知識、すなわち選挙、議会をはじめとする政治制度、政党、官僚制、利益集団といった政治過程の担い手や、さらには公共政策のあり方などについて理解を深めることである。こうした基礎的知識に対する理解の欠如が政治をめぐる議論を混乱させていることは、しばしば見られることである。健全な判断力を持ち公共の事柄に積極的に関与する良識ある市民の育成は、政治学教育の一つの大きな目標である。なお各章の記述は一応独立させているので、やや抽象的な議論を展開している部分は後回しにして、興味をもった章から少しずつ読み進んでいく方法もあるかと思う。

この本で第二に意図していることは、大学で政治学に関する講義の教科書ないしは参考書として利用されることである。近年では大学生の政治に関する基礎的知識の不足に対応して、現代日本政治を中心に身近な題材から政治学を学ぶことも多いが、(従来、政治学原論などの名称で講義されてきた)政治という営みに関わる基礎理論を学ぶことはやはり重要である。また、すぐれた政治家の条件は歴史に精通することだといわれるように、政治分析に歴史的洞察は不可欠である。したがって、この本では伝統的な「政治学」の枠組みに従いながら、狭い意味での政治理論の範囲に留まらず、現代政治を考察するため最低限必要な幅広い知識と、政治および政治学に関して繰り返し議論されてきた論点のエッセンスを把握できる内容となるよう配慮した。

さらにこの本に関する第三の意図としては、政治家、行政に関与する公務員、各種団体の職員、NPOのメンバー、ジャーナリストなど広い意味で職業的に政治的決定や政策形成に関与する人々に役立つものとなることである。政治学は公務員試験の必修科目ではあるが、職業生活と政治学的知識・理解との接合は明確なものとはいえない。政治家になるためには政治学を必ず学ぶというものではないし、ある政治問題に対して「公共政策」という形で解決策を示すことは、数学が公式に従って「解答」を示すのとは大きく異なる。しかし、政治諸科学(政治学が「科学」としていかなる性格をもつかについては後述する)がこれまで蓄積したさまざまな知見は、混迷した現代世界において狭いイデオロギーや固定観念にとらわれず、幅広い視点から問題に対する合理的解決策を思考するうえできわめて重要な素養となるであろう。

この本が、大学で政治学に関する講義を受講する学生の便宜に適うだけでなく、すでにさまざまな社会経験をもち市民の方々に広く活用され、現代世界において政治という人間の営みがもっている可能性への関心を引き出し、とかく敬遠されがちな「政治」の世界が少しでも身近なものに感じられ、現代世界を抱える諸問題の解決にわずかでも資するものになれば望外のことである。